

大学・短期大学部卒業生の皆さん、そして大学院修了生の皆さん、ご卒業、ご修了おめでとうございます。また、本日は残念ながらこの会場にはご列席いただけませんが、ご家族の皆さま、ご関係の皆様にも心からお慶びを申し上げたいと存じます。

皆さんが学生生活を振り返るとき、きっとコロナ禍のことは忘れることができないと思います。4年間本学で学んだ皆さんは、とくに中間の2年間で学生生活が一変したことと思いますし、学修にも課外活動にも苦労されたことと思います。短期大学部卒業の皆さんは、入学時にすでにコロナ禍の真只中でした。とくに短期大学部は在学期間が短いですから、貴重な時間をコロナに振り回されたと感じている方もいらっしゃると思います。そうした中で努力して正課の学業を全うし、工夫を重ねて正課外の活動にも取り組みながら今日を迎えられたことに、あらためて敬意を表したいと思います。

さて、大学や短期大学部を卒業して、これからがいよいよ皆さんの本当の人生です。そうした皆さんに何をお話ししようか、毎年迷うのですが、ともかくお聞きください。

私は高校時代には国語、とくに現代文の授業が苦手でした。苦手だった分、かえって授業の内容でいくつか覚えていることがあります。その一つとして、ある時現代文の先生が、「君たち、優れた小説とそうでない小説の見分け方を知っているか」と私たちに問いかけたことがあります。皆さんならどう答えるでしょう。ストーリーが面白いことでしょうか。登場人物の性格がよく描き出されていることでしょうか。それとも、描写が生き生きしていることでしょうか。この先生の答えは、「主人公が、小説の始まりと終わりで、内面的に変化していることだ」というものでした。

もちろんこれが唯一の正解でないことは申すまでもありません。この答え自体も、小説はリアルな人間を描かなければならないという、一つの、ある意味では狭い立場に基づいているともいえるでしょう。

しかし、ここで大事なのは、「人は変化するものであり、変化して当然なのだ」ということではないでしょうか。皆さんはこれから、社会に出て、今までは想像しなかった体験もすることでしょう。楽しい体験もあれば、辛い体験もあるはずです。いずれにしても、想像しなかった体験をした結果、想像もしなかった変り方をするのは、むしろ当然のことかもしれません。

これは個人だけの話ではありません。社会や世界も、必ず変わっていくものだと思います。

皆さんが入学する何年も前に、「ヨーロッパの社会と文化」という科目を担当していたことがあって、その中で「女性と労働」というテーマについて、ある映画の一場面を見てもらったことがあります。19世紀末、今から130年以上も前のイギリスの話で、冬の厳しい寒

さの中、女性たちが夜になるまで、かちかちに凍りついた畑を鍬で割って、地下の芋のような根茎を掘り起こしている場面です。観た後に感想を書いてもらったのですが、その中に、「どうしてこんなきつい仕事をしているんだろう。ハンバーガーショップでバイトしたらいいのに」という感想がありました。最初は冗談で書いたのだろうかと思ったのですが、その学生に聞いたら、本気だったようです。ちなみに、この学生はたいへん熱心に授業に取り組む学生でした。この例が示すように、時代が変われば、たとえば労働の形態も、意識も、大きく変わっていくわけです。もちろんこれは、他のあらゆる社会事象について言えることです。

しかし、ある時代の渦中にいれば、なかなかそれが見通せず、いつまでも同じ状態が続くように思いこんでしまいがちです。皆さんが経験したコロナ禍も、繰り返し感染の波が襲ってきて、このままいつまでも続くような気になった人もいることと思います。けれども、状況は変化しつつあり、新型コロナウイルス感染症もやがて感染症法上の5類に分類されて、アフターコロナへの道が徐々に開かれつつあるようです。もちろんまだまだ油断はできないのですが、このことからしても、暗い状況がいつまでも続くということはないと言えるでしょう。もちろん、よい状況も残念ながら永續することはないはずですが、ですから、私たちがなすべきことは、状況が絶望的に思えても決してあきらめず、また順調に思えても決しておごらずに、その時その時に精一杯考え、よいと思われる方向に努力することであって、その結果自分に訪れる変化を楽しみにするようにしてほしいと思います。皆さんは決して一人ではありません。多くの他者と理解しあい、協力し合うことによって、人生を肯定的に生きていってほしいと願っています。

栄養科学研究科の修了生の皆さんに一言申し上げます。栄養学を専門に研究してきた皆さんには釈迦に説法だと思いますが、食は生命の基礎です。社会や生活がどのように変わろうとも、人は食なしでは生きていけません。人がますます長い人生を送れるようになると、その長い人生のQOLをいかに高めるかが課題となるわけですが、そのために栄養学の必要性はこれまで以上に高まっていると言えます。もちろん学問としての自律性は、単に実利的な面だけでは測れないでしょうが、多様化する社会的な要請にもよく耳を傾けていただいて、ますます専門家としての研鑽を積まれることを期待しております。

社会起業研究科の修了生の皆さんにも一言申し上げます。現代はいわば社会科学の時代だと思います。とくに皆さんの場合、そのフィールドは、実際に多様な人々が生活している社会です。そこには、データやトレンドに集約しきれない、さまざまな事情や願いがひしめいています。皆さん一人一人が、社会を対象とする専門家であると同時に、こうした社会の一員でもあることを忘れずに、大学院で学んだ知識や方法を十分に活かして、地域と社会に新たな展望を示し、活力をもたらしてくださることを、大いに期待しております。

簡単ではございますが、以上をもちまして、卒業生におくる言葉といたします。